



広報

中部の森林



国民の森林・国有林

林野庁
中部森林管理局

〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>



斧を入れる杣人（三ツ紐伐り）【木曽】



鳥総立により祭事終了【東濃】



化粧がけをする杣人【木曽】

木曽と東濃の2箇所、 次期神宮式年遷宮御用材斧入式が執り行われる

主な項目

- 中部森林管理局 木づかい推進月間協賛シンポジウム開催…………… P2
- 各地からのたより…………… P4
- シリーズ「森林官等からの便り」…………… P9
- シリーズ「ご当地自慢」…………… P10

**木づかい推進月間
協賛シンポジウム開催**
(木材のカスケード利用に向け)
めざすは「山元(主)への還元」

「名古屋事務所」十月二十六日、「熱田白鳥の歴史館」で、一般社団法人 森林・自然環境技術者教育会 (JAFEE) 主催のシンポジウムが行われました。

会場には一般の方を含め百人を超える聴講者が来場し、当局新島局長ほか、東京大学名誉教授 酒井秀夫氏、株式会社 佐合木材 代表取締役 佐合隆治氏が講演されました。

新島局長は、「『先人』の汗した山を『次世代』に引き継ぐ」との題目で、人工林資源は利用期であることの説明から



講演する新島局長



講演する佐合木材 佐合氏

始まり、森林は環境財であることを認識すべきこと、林業の再生にはコストの縮減とサププライチェーンの構築が重要なことなど多岐にわたり、わかりやすい説明に聴講者は理解を深めていました。

佐合氏は、「『枝葉まで使い切る』をめぐりながらの講演をされました。起業家から見て川上、川中、川下が手を携えることが大切、輸送経費の削減が重要であるなどの話をされ、千年万年も続く仕事に繋げたいと結ばれました。

酒井名誉教授は、「伐って、使って、植える」との題目で、国内外の多くの写真を使って、今までの林業とこれからの林業は違う、林業は流通の時代となるとの内容で講演されました。最後に、講演された方々から山元への

還元について一言ずついただき、来場者からの大きな拍手をもってシンポジウムは終了しました。
名古屋事務所では、これからも都市住民に森林・林業について理解を深めるためのシンポジウムなどにも積極的に取り組んでまいります。



山元への還元について話をされる酒井名誉教授

緑山会総会を開催

「名古屋事務所」十月二十七日、「熱田白鳥の歴史館」で、平成二十九年度緑山会 (林野庁関係機関の元職員のみ) 総会が開催されました。

総会には新島局長、金口次長、丸山愛知所長等が来賓として出席し、緑山会からは四十七名の会員が出席し盛大に開催

されました。

来賓挨拶では、新島局長から先輩諸氏への敬意、最近の森林・林業をとりまく情勢や中部局の取組などを含めた挨拶がありました。

総会では、昭和四十年代に撮影された映像を上映したところ、当時を懐かしむ声が多く聞かれました。

旧時木場、旧分局があったこの地で、一年に一度ですがお互いの健在を確かめ合い、また、来年この場で懇談することを楽しみに総会は無事終了しました。



出席者全員での記念撮影

新県庁舎などに県産材利用を！

木材利用推進を岐阜県知事らに要望

「名古屋事務所」木づかい月間中の十月二十六日、岐阜県木材利用推進協議会（丸山輝城会長）が岐阜県知事はじめ各部署に対して木材の利用推進に関する要望活動を実施しました。名古屋事務所からもオブザーバーとして、二名が参加しました。

要望活動は、最初に公共建築物及び商業施設等の木造化や木質化の促進、住宅分野における木造住宅支援強化、木育推進などといった例年要望している項目に、建て替えが予定されている県庁舎整備における県産材利用や東京五輪関係施設への利用活動の展開などについての項目を加えた要望書を、丸山会長から古田岐阜県知事に手渡しました。

その後行われた知事との意見交換においては、再来年度開館が予定されている「森の恵みのおもちゃ美術館」を他にない特色ある施設に、森林・林産業においても女性が活躍できる職場となるよう支援を、などといった要望が出されました。

古田知事からは来年度の予算編成を行う時期であり、要望内容も含めて今後検討を行っていききたいとの話がありました。

さらに知事からは「おもちゃ美術館に

ついては見せるだけでなく、木育には色々なやり方があるので、施設整備に併せて考えていきたい。女性が活躍する場を広げる一例として、県では女性消防団員を増やす取組を進めてきた。その結果、全国的に減少している消防団員が岐阜県では増えているという実績に繋がっている。林業関係でも工夫すれば活躍できる職場となるはず、他の業種に波及できるといった取組を考え進めて欲しい」との話をいただきました。

協議会と県が目指す方向は同じであると認識しており、今後も一緒に取り組んでいきたい旨の表明を知事から示され意見交換を終えました。

続いて行われた林政部長との意見交換では、主伐再造林を推進しているが予定に対して低調なことから、木材利用の面から協議会にも協力を願いたいと逆にお



古田知事（左）に要望書を手渡す丸山会長（右）

**災害時の燃料供給について
協定を締結**

【経理課】十一月十日、長野県石油商業組合（渡邊一正理事長）と「災害時の石

油類燃料の供給等における相互協力に関する協定

願いされる場面などもみられました。

十月十八日に発表された東京五輪における選手村ビレッジプラザ協力者として、岐阜県及び県内六自治体が選ばれているという明るい話題もあった関係からか、参加した協議会メンバー及び県関係部局職員の表情も明るい雰囲気が漂う中での要望活動となりました。

今後も協議会と連携しながら木材利用推進を進めていきたいと思えます。



高井林政部長（奥左から3人目）との意見交換で発言する金口次長

油類燃料の供給等における相互協力に関する協定」を締結しました。

中部局では山地災害が発生した際には、災害対策本部へのリエゾン派遣、県や市町村等との合同調査、さらに被災自治体への技術的な支援・助言を行う森林技術者等で編成した「山地災害対応チーム（MDSAT）」の派遣などを実施しています。

この協定は、長野県内において地震や豪雨等による災害が発生した場合に、山地災害の被害把握や復旧作業に必要な車両や非常用発電機等への燃料について優先的な供給を実施するとともに、平常時においても連絡体制などの情報交換



協定締結を披露

を行って、このような災害に迅速な対応が実施できるよう協力体制の構築を図るものです。

同組合の渡邊理事長は、「万が一の時には組合員一同、全力を挙げてご支援申し上げる。重く責任を受け止めている」と支援を約束され、「ガソリンスタンドが減少する厳しい状況だが、平時からのお付き合いのなかで育てていただきながら協力させていただきたい」と平時の利用も御願いされました。

これを受け新島局長は「MDSATを派遣する対応を今年から始動しているが、現場に駆けつける燃料が無いと何もできない。協定を結んだことで本当の意味で竜の絵に目が入ったと思っっている。日頃からお付き合いさせていただき、情報の共有を含めて対応していきたい」と挨拶しました。

協定の締結により災害対応活動が充実することで、被災地の復旧・復興に一層の貢献ができることを期待します。

各地からのたより

次期神宮式年遷宮御用材

伐採斧入式が執り行われる

〔木曾署〕十月二十八日、当署の小川入国有林において、次期神宮式年遷宮御用材伐採斧入式が行われました。斧入式は、二〇年に一度三重県にある伊勢神宮

の社殿等を造り替える式年遷宮に向けた祭事です。三ツ紐伐りという伝統的な木曾式伐採法によって、直径五八センチメートル、樹高二八メートルの三百年生の木曾ヒノキが御料木として伐倒されました。三ツ紐伐りとは、斧で三方向から幹の中心に向かって穴を開け、残った弦の一本を切断することで伐倒する方法です。

当日はあいにくの雨でしたが、伊勢神宮や木曾奉賛会の関係者・上松町役場・地元の住民等や遠方からの観客等、約百五十名が見守る中、祭事が執り行われました。

烏帽子や素襖と呼ばれる青い装束を身につけた杣人が斧を三回振り下ろす儀式を行った後、白い作業着を身にまとった



三ツ紐伐りで斧を入れる杣人（木曾）



三ツ紐伐りで斧を入れる杣人（木曾）

杣人六名が交代しながら御料木を伐倒しました。斧入れの音が爽快に響き渡る中、約四十分間かけて伐り込みの作業を行いました。その後「オオヤマノ神、左斧、ヨコ山、一本ネルズ」という杣人による掛け声があり、杣人が追弦を伐りました。さらに御料木が倒れかかると「イヨイヨネルズ」という掛け声で杣人が横弦を伐り、御料木は地面を揺らし伐倒されました。伐倒と同時に観客からは「おー」という歓声と拍手が起きました。伐倒後、御料木の梢を株に刺す鳥総立が行われ、祭事は終了しました。

観客からは「迫力がすごかった」「森

に響く斧の音が神聖だった」といった感想が聞かれました。また、上松町長によると御料木の樹齢は年輪を数えたところ、四百年以上であったということでした。

なお、十一月三日には上松町で御木曳が行われました。

東濃管内の

次期式年遷宮御用材伐採斧入式

〔東濃署〕十月三十日、当署の加子母裏木曾国有林にて次期式年遷宮御用材伐採斧入式が執り行われました。当日は台風一過の快晴ながら強い冷え込みを感じました。会場には、国有林関係者、裏木曾



杣人が斧を3回振り下ろす儀式（東濃）



三ツ紐伐りで斧を入れる杣人（東濃）

奉賛会、国有林を抱える地元関係者、さらには次期を担うであろう加子母・付知の中学一年生も見学に訪れ、約三百名が参加し見守りました。斧入式の伐採木となった御用材は一〇二年生（大正五年）の胸高直径五十二センチ・樹高二二メートルのヒノキで、御用材を中心にやぐらが組まれ三ツ紐伐りで倒し横たわると歓声と拍手に包まれました。切り倒した御用材は四日に護山神社で奉送迎祭、五日に市内で「御木曳き」とされ披露されました。

ニホンジカ食害防除対策 検討会を開催

〔岐阜署〕十月十九日にケーススタディ（※国の森林総合監理士等が市町村への



講義に聞き入る参加者

協力を推進するための事例研究）地区の七宗町において、岐阜署、森林技術・支援センターの共催で、ニホンジカ食害防除対策検討会を開催しました。

ニホンジカの食害が深刻化している中、適正な頭数に管理する個体数調整や、造林地へシカを侵入させない、あるいは食害を防止するための防護対策について、国、県、市町村が情報を共有し、意見交換を行うことにより、この地域でより効果的な対策を行うことを目的とするもので、市町村職員等十二名、岐阜県職員五名、国有林職員十三名が参加しました。

今年度は各市町村の森林管理委員会への出席等により、国有林の所在しない市町や森林組合等からも参加していただきました。

午前中は岐阜県森林研究所の岡本専門研究員からニホンジカ対策の現状と課題について、また岐阜署の松嶋総括地域林政調整官から国有林におけるニホンジカ対策について講義と意見交換を行いました。

あいにくの雨で午後からの現地検討会は縮小して行いましたが、森林技術・支援センターの三村森林技術普及専門官から七宗国有林に設置したシカ対策試験地の概要説明、建物の外でくくりワナの実習を行いました。

主伐・再造林を進めるにあたり、ニホンジカ対策は重要であり、低コストで効

果が期待できる防除対策やくくりワナに関する質問が多く出され、有意義な意見交換になりました。
今後もケーススタディ地区の七宗国有林をフィールドとして研修会等を積極的に開催していきます。

木曾の 国有林見学会（秋季）を開催

〔木曾森林ふれあい推進センター・名古屋事務所・木曾署〕十月二十四日、木曾森林管理署管内の赤沢自然休養林で、木曾川下流域の住民を対象とした「木曾の国有林見学会2017秋季」を開催しました。

この催しは、江戸時代から深い繋がりを持つ木曾地域と木曾川下流域の名古屋の関係や、森林・林業について理解を深



金口次長より歓迎の挨拶



職員による説明の様子

めてもらうことを目的に、下流域の都市住民の方々に、木曾川源流域の国有林を訪ねてもらい、木曾地域の林業の歩み、木材輸送方法（伐採地、小谷狩り、森林鉄道、林業遺産）及び名古屋の熱田白鳥湊にたどり着くまでの運材技術の変遷や木材の生産地を実際に見聞きしていただく学習講座で、平成二十七年から春季及び秋季の年二回開催しており、口コミ等により名古屋市民から好評をいただいております。

当日は、心配していた台風による影響もほとんどなく、名古屋市内を中心に参加された四十一名とスタッフ一名の四十二名が名古屋事務所「熱田白鳥の歴史館」を出発。一路木曾路に向かいました。赤沢自然休養林到着後は、金口次長をはじめガイド等を行う国有林職員七名

により現地案内を実施しました。

参加者はこの見学会に先立ち、十月十七日に、名古屋の木材産業と森林・林業の歴史や、国産材を使うことの意味、上流域の森林（国有林）と下流域の名古屋市の結びつきなどを同歴史館で事前学習しました。

また、途中からバスに乗り込んだ森林ふれあい推進センター新家所長から、赤沢自然休養林までの景勝地等の説明を受け、想いを膨らませながら木曾ヒノキの生地へ向かいました。

一行が赤沢自然休養林に到着後、金口次長からの歓迎の挨拶があり、森林交流センター周辺で昼食をとり、森林鉄道に乗りしました。木曾ヒノキの森林と溪流が織りなす景色を眺めながら終点の「丸



パズルラリーに挑戦する参加者

山渡停車場」で下車し、歴史とともに育まれてきた樹齢三百年余りの木曾ヒノキやサワラが生い茂る林内を散策しながら、職員のガイドにより、木曾の林業の歴史や運材方法、伊勢神宮との関わり、木曾五木の樹種の見分け方や特徴などを学習しました。

また、散策の傍ら、赤沢自然休養林内で実施している「パズルラリー赤沢コース第四弾」にも挑戦していただき、パズル箱から紙片ピースを集めて、最終箇所の赤沢資料館で応募用紙に記入し、木製パズルを受け取りました。

参加者からは「ヒノキとサワラの見分け方を学習した」「森林鉄道から見える赤沢の風景は美しかった」「森林を散策して爽快な気分になった」「パズルラリーも楽しかった」などの感想が聞かれました。

この催しは、木曾復興支援の取組としても位置づけており、今後も実施にあたり参加者からの意見を企画に反映させ、より意義のある催しとなるよう努めてまいります。

ササ一斉開花等に関わる

情報交換会を開催

〔愛知所〕十月十九日、愛知森林管理事務所において、「ササ一斉開花等に関わる情報交換会」を開催しました。

当所では、平成二十八年六月に段戸国



ササの開花

有林（愛知県設楽町）で二二〇年に一度と言われるササの一種「ススタケ」の開花が確認された以降、過去にササ一斉開花時にササの実を餌に野鼠が異常繁殖し、造林木への甚大な被害が発生した記録等を踏まえ、森林の影響調査等を国立研究開発法人 森林総合研究所、愛知県等と連携して実施してきたところです。

今回の情報交換会はこの二年間行ってきたササの「開花状況調査」「結実量調査」「野鼠生息予察調査」についての調査結果報告と意見交換を行いました。

開花状況調査報告では、段戸国有林におけるササの開花は平成二十八年度が前ぶれ咲きで、ササ群落全体の開花率は一五％程度、平成二十九年度は本開花です。群落全体の開花率は八〇％程度で、平成三十年度に遅れ咲きとして残りの

五％が開花する見込みとの報告がありました。また、結実率も同程度との報告がありました。

野鼠生息予察調査報告では民有林と国有林においてトラップによる調査を夏と秋の二回行ったところ、最大で鈴当たり十四匹（木をかじるハタネズミ類は最大三匹）を捕獲したとの報告がありました。

意見交換では、「野鼠の大量発生の可能性は」、「殺鼠剤散布の必要性は」など今後の野鼠被害対策への対応についての意見が多くありましたが、今回実施した野鼠生息予察調査が被害発生を危惧する捕獲数にはなっていないことから当面野鼠の駆除対策は必要ないと判断しまし



意見交換の様子



姫川治山事業所の展示ブース

〔中信署〕十月十五日、新潟県糸魚川市

キノコ祭り

治山事業をアピール

また、「草地に隣接する国有林での野鼠生息予察調査が必要では」、「中部森林管理局管内全域のササの開花状況の把握が必要」などの意見もあり、それらを踏まえ今後も継続的な調査を行っていくことを確認しました。

当所としては、関係機関と連携を図る中で調査結果のデータベース化を図るとともに、今後とも春先の苗木の被害状況やササの開花状況を引き続き注視していくこととしています。



職員が子供たちへ説明中

大所の木地屋の里で毎年開催される「木地屋の里 キノコ祭り」に今年初めて参加し、姫川治山事業所で行っている、民有林直轄治山事業（復旧治山と地すべり防止）について、展示ブースを設置し理解を深めていただきました。

工事は奥地で実施されており、どんな目的でどのような工事を行っているのか、知らない糸魚川市民が多いのでないかと、糸魚川市長の言葉から今回の参加となりました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、事業所の若手三人の職員がパネルを使って、森林管理署の業務内容説明と大所地区において昭和四十八年から行っている

工事に関し、地すべり防止工事については集水井工などの作業風景、復旧治山工事については鋼製柵谷止工の完成写真などを使い説明しました。大人からは施工方法など質問があり、子供たちはイラストで描かれたハチ・キノコなどに興味を示していました。

今後とも地域と連携した取組を進める中、地域の方々に森林の大切さ、治山事業の重要性などを知っていただきたいと考えています。

農林高校生の林業就業に向け

林業体験学習

〔岐阜署〕十月十八日と二十四日に、岐阜県可茂農林事務所と岐阜署が、民国連携による農林高校生の林業就業に向けた取組として林業体験学習を行いました。

目的は、地域の若い人材を地域の担い手として確保するため、林業に関する専門教育を行っている岐阜県立加茂農林高等学校森林科学科の生徒を対象に、林業・木材産業への関心を高め就業を促進することを狙いとしています。

例年は現地実習のみの開催でしたが、現地では十分な説明ができないため、今年度は事前に高校の授業で森林・林業の概要を説明し、一週間後に現地実習を行う二段階の構成としました。岐阜署からは先進的に取り組んでいるコンテナ苗やニホンジカ対策等について講義を行いま



森林づくりへの熱い思いに聞き入る高校生

現地実習は、七宗町上麻生地区の森林共同施業団地（ケースタディ地区）で伐採作業、高性能林業機械の見学・体験を行い、可茂森林組合の森林技術者からは、森林づくりへの熱い思いを語っていただき、当署の森林官（七宗森林事務所）により林業被害の軽減に向けてニホンジカを捕獲する、くくりワナの実演等を行いました。

その後は地域の木材市場等を見学し、林業・木材産業への理解を深めました。加えて、森林組合、木材団体、各行政機関から、卒業後はぜひ我が職場へと就職を呼びかけました。

中部森林管理局と

森林総合研究所等が

技術交流会を開催、

関係者相互の知見や認識を共有

【木曽署】十月二十六から二十七日、木曽森林管理署において、当署職員と各地の国立研究開発法人森林総合研究所研究者の他、木曽地方事務所、長野県林業大学校、岐阜大学、富山県や地元市町村林務担当者、中部森林管理局関係者など約六十名が参加し、第七回「中部森林管理局 森林総合研究所 技術交流会」を開催しました。

この交流会は、木曽谷の国有林において、中部森林管理局及び森林総合研究所をはじめとする各研究機関や大学による様々な試験研究や調査が行われており、技術開発及びそれらにより得られた成果の普及を図り、相互に知見や認識を共有することを目的とし、平成二十三年度より開催されています。

木曽谷の国有林には、世界的に見ても非常に貴重な森林である温帯性針葉樹林がまとまって分布しており、この温帯性針葉樹林を保存・復元することを目的とした「木曽悠久の森」が設定され、この取組は天然更新の重要性が高く、多くの試験や研究が行われています。

また、国内でも有数の木材生産地であり、木曽ヒノキをはじめとする天然林や高齢級人工林が分布し、研究機関や研究

者にとって非常に興味深いフィールドでもあることから様々な調査が行われており、これらの調査を含め、様々な調査研究結果について発表が行われました。

一日目は、技術研究発表会が行われ、森林総合研究所からは、木曽ヒノキの天然更新を検討する上で課題となっているササ処理と更新樹種の調査、赤沢ヒノキの三〇年の歩み、水木沢天然林の林分構造について、また、森林管理法の提案や花粉症対策と高齢ヒノキ林の関係について発表が行われ、興味深い話題が提供されました。

岐阜大学からは、アスナロてんぐ巢病



木曽署から発表の様子



現地見学会の様子

がヒノキに及ぼす影響について発表があり、木曽森林管理署からは、御嶽山噴火の対応の取組、天然更新実証試験の報告、森林技術・支援センターからは多様な森作りについて、木曽森林ふれあい推進センター及び南木曽支署からはシカ被害対策の取組についての発表を行いました。

今回は幅広い課題の発表があり、それぞれの課題について関係者から多くの質疑があり、有意義な意見交換の場となりました。

二日目は、小木曽国有林にある水木沢天然林において、森林総合研究所が調査している試験地などを見学しました。水木沢は木曽谷の天然林の中ではめずらしい木曽ヒノキ、天然サワラとブナなどの

広葉樹が混交した林分で、木曽谷の天然林が木曽ヒノキを主体とした現在の林分になる前のヒントになる林分でないかという点で森林総合研究所では林分構造を調査しています。また、水木沢にある百年生のヒノキ人工林の間伐箇所、間伐効果による下層の発芽状況を観察しました。

今回の交流会を通じ参加者からは、「木曽ヒノキの更新や管理技術をはじめとした技術的課題について情報共有し率直に意見交換できることが大切」、「今回報告された取組が、今後の展開や施策につながるよう協力していきたい」などの感想が寄せられました。

また、発表者からは試験研究結果を事業の担当者や地域の関係者に共有する良い機会であり、今後も継続して開催していただきたいとの要望もありました。当署としても、この交流会を継続し、広く試験研究成果を普及させ関係者相互の知見や認識を共有していきたいと考えています。

行事・会議等の予定

◎ 治山課長会議

1月22日

【林野庁】

◎ 森林管理局事業担当課長会議

1月25～26日

【林野庁】

◎ 中部森林技術交流発表会

1月30～31日

【中部局】



「岐阜県揖斐森林事務所」

首席森林官 村井千秋

揖斐森林事務所は、岐阜県揖斐川町に所在しており、県の南西部にあたる揖斐川流域を管轄し、国有林野九、九六〇^〇、官行造林地四五〇^〇を森林官、行政専門員、非常勤職員の三名で管理しています。

管内の国有林は、県内西濃地方を代表する山の一つである能郷白山や、夜叉ヶ池（池は福井署管内）登山への岐阜県側の登山口をはじめとする自然景観に優れた森林となっているほか、里に近い国有林では人工林スギ・ヒノキを中心とした木材生産、森林育成を行っています。

一方、急傾斜地で崩壊の恐れが多いこの地域では、岐阜西部治山事業所により多くの治山事業も進められています。

能郷白山については、白山開山一、三〇〇年を迎えたことにあわせ、本県市



「能郷白山」山頂

をはじめ地元を各機関で多くの記念行事等が計画されており、ここを訪れる観光客の増大が見込まれています。これに対



龍神伝説の「夜叉ヶ池」

応するため、森林事務所も登山道整備等の相談等を受けています。

また、揖斐川町では、町内の檜原谷地区において、岐阜県揖斐農林事務所、揖斐川町、池田町、森林整備センター、檜原谷林野組合、株式会社岐阜緑地、揖斐郡森林組合との「檜原谷地区森林整備推進協定」の締結に向けて取り組みを進めています（二月十五日調印予定）。これにより、民有林、国有林が連携した林業経営が現実のものになりつつあります。とりわけ、森林整備センターにおいては、国有林林道から森林整備センターが管理する森林へアクセスする林業専用道の開設に向けた計画が実現すれば、利用期を迎えた森林の間伐が図れるとして大

いに期待されています。

今、この地域を管轄するうえで一番の問題となっていることは、獣害です。スギ、ヒノキの植栽直後から、利用できる径級のものまでの被害、樹皮剥ぎにより多くの被害が出ています。揖斐川森林計画区は特にニホンジカの森林被害が著しい地区として「シカによる森林被害緊急対策事業（全国で八箇所）」が行われており、生息調査をはじめとする対策が進められています。

森林事務所においてもニホンジカ、イノシシ等の獣害被害拡大を防止するため、職員による捕獲を進めており、今年度も多くのニホンジカ、イノシシの捕獲を行い、国有林の下流域域でお茶畑を営んでいる農家の方々に感謝されるとともに「もっと捕って欲しい」との要望も出されています。

捕獲作業は動物の命を奪う仕事であり、これまで経験がなかったことから、心理的な抵抗感がありますが、森林を育てるためには必要なことであると考えています。適切な獣害対策を行いながら森林を守り育てていきたいと思っています。これからも一本一本の木に対する気持ちを持って、大切に森林を守り育てていきたいと思っています。



食害状況と忌避剤散布の確認



はこ罠に掛かったニホンジカ



くくり罠に掛かったニホンジカ



職員一同（左が筆者）

檜原谷地区、岐阜のマチュピチュ天空の展望台より（後方は揖斐平野）



国指定遺跡 星ヶ塔黒曜石原産地遺跡 (以下星ヶ塔遺跡) は、南信森林管理署管内の東侯国有林内に位置しています。



星ヶ塔遺跡の黒曜石発掘抗

付近は本州のほぼ中央にあり、ガラス質火山岩「黒曜石」の原産地が数多く存在する地域として知られ、本州最大の黒曜石原産地と呼ばれています。

黒曜石は、打ち割ることによって容易に鋭い刃を持つ欠片を手に入れることができ、細かな打ち割りによる加工を加えることで様々な形に変形することが可能なことから石器時代の石器の原料として広く用いられました。

黒曜石は、遠隔地まで流通されたことが知られており、黒曜石を持ち運んだ当

時の人々の動態や交流、徒歩に頼った時代の遠方との結びつきなど黒曜石が流通していた頃の社会のあり方を解明する試みが行われています。

星ヶ塔遺跡は、霧ヶ峰山塊の北西部にある星ヶ塔山の東斜面の標高一、五〇〇の林内に広がる縄文時代の黒曜石採掘遺跡です。現在までの調査では、約三五、〇〇〇平方メートルの範囲に縄文時代の黒曜石採掘跡が一九三か所分布していることが明らかになっています。発掘調査により縄文時代前期(約五七〇〇年前)と晩期(約三〇〇〇年前)の黒曜石採掘跡が発見され、長期間にわたる黒曜石採掘跡であることがわかっています。

星ヶ塔遺跡の黒曜石は、理化学的産地分析により東北から東海地方までの極めて広い範囲に供給されていることが明らかにされています。

このように星ヶ塔遺跡は、縄文時代の資源開発と流通を考えるうえで極めて重要な遺跡として、平成二十七年三月に国史跡に指定されました。

星ヶ塔遺跡について、史跡を管理する地



縄文人が掘り出した黒曜石



下諏訪町埋蔵文化財センターのジオラマ

方公共団体として下諏訪町が指定され、管理、運営及び活用等を図るため、遺跡を中心に周辺約三ヶ所の国有林を下諏訪町からの申請を受けて貸付けしています。

自家用車等での入山ができないことから、希望者向けに下諏訪町教育委員会が開催する見学会等が行われています。

また、平成二十九年四月二十九日に開館した下諏訪町埋蔵文化財センターでは、諏訪地方で発掘された黒曜石や土器の展示のほか、星ヶ塔遺跡で発見された黒曜石発掘抗を忠実に再現したジオラマがあり、訪れる人々の目を引いています。

◆星ヶ塔の由来

星ヶ塔遺跡を訪れるとカラマツ三十九年生の林内に点在する黒曜石採掘跡地から古代の人々が打ち割ったと思われる黒曜石の細かな欠片が無数に確認できます。晴れの日、日の光を反射し、雨の日には黒光りが増し、夜は月光りや懐中電灯の光を

受けて幻想的な輝きを放ちます。

星ヶ塔遺跡を発見した鳥居龍蔵によれば、星ヶ塔はもともと「ホシノトウゲ」と呼ばれていたようです。星ヶ塔遺跡の東側は、鷲ヶ峰の山裾と星ヶ塔山の間のへこんだ部分であり、山道の峠になっています。この峠に「ホシ」があることからホシノトウゲと呼ばれていたのですが、昔の人々は黒曜石のことを夜空に輝く星のかけらと考え「ホシクソ」と呼んでおり、そのホシクソが峠道にたくさんあることから「ホシノトウゲ」という地名がつけられました。のちにそれがホシノトウ、そして「ホシガトウ」と呼ばれるようになり、その後漢字が当てられ、現在の「星ヶ塔」となったとのことです。



星ヶ塔周辺の遠望

問合せ先 下諏訪町埋蔵文化財センター
電話【0266(27)1800】